

インド宗教思想史における寛容性の一断面

——ラーマクリシュナを中心として——

奈良康明

1

インドほど、思想と宗教体験が密接にかかわっている国はないのではないか。ウパニシャッドの神秘家たち以降、少なからぬ宗教者の体験は思想として表出され、精緻な論理をもって綴られる。哲学思想は体験に裏打ちされていることが少なくない。語録や著作をのこした神秘家も多く、その中でもラーマクリシュナは種々の面でユニークな地位を占める。

ラーマクリシュナ (Ramakrishna Paramahansa, 一八三四—八六⁽¹⁾)

はヒンドゥー教バクティ (Bhakti) —— 信愛 —— 思想の系譜に連なる人で、貧しいが敬虔なバラモンの家に生れた。学校教育も途中で止めてしまった人だが、彼の語録『不滅の言葉』(Kathamata) を読むと、その人柄は、まことに純粹で奥行き深い宗教性

の中に生の人間味があふれている。偽善を憎むきびしい姿勢と裏腹にジョークを連発する軽妙さがあり、母と仰ぎ信ずるカーリー女神と恍惚の瞑想の中に会話する反面、他人の言葉や身振りを真似て信者たちを爆笑させたりする。女性の声色を使ってみせることもあり、神の讃歌を歌わせば素晴らしくうまい。インド古来の叙事詩やプラーナ文献などに記される物語、伝承、神話の知識は該博で、記憶力は卓越している。

伝統的な哲学思想、特にヴェーダーンタ派やサーンキヤ派の思想に言及することもあるが、こうした分野の専門的訓練を受けたわけではないから、決して体系的ではない。ラーマクリシュナは、所詮、「神の愛に酔い」つつ、生きることを完うした宗教者である。自らを酔わせる神を疑もなく実感しているものの、それを哲学的に分析し、神と万物存在の関係を哲学的に説明しようとした

わけでもない。むしろそうした知的操作を徹底して斥け、神を「見る」ことに最大の価値をおいている。彼のまわりには比較的知性が高く、社会的地位もある人々が多く集まっていた。学者や宗教者もしばしば訪れている。時には哲学的論争に近い会話も行われることもあった。ラーマクリシュナは時折、これに加わることもあるが、多くの場合、最後には議論の不毛なることを言い、実際に神を求めてゆく実践の大切さを説く方向に話をもっていくてしまう。彼の語るのはまことに巧みな譬喩と、ユーモアと、驚くべき豊富な神話、伝承を実存的に解釈しての説法だった。従って、彼は思想家というよりはむしろ、古来よりのインド思想——それもたとえば六派哲学の何派の思想、というように特定のものではない——に拠りつつ、それを自らの体験の中に実証してみせてくれた人、といっている。

ラーマクリシュナは六、七歳のころに二度の特異な一種の体験を得、十歳の時には、苦行者としてのシヴァ神に扮して芝居をしようとした時に、第三回目の体験をもつ。この第三回目の体験は、後年、ラーマクリシュナが初歩の瞑想体験として位置づけたものにあたるという。

十七歳の時に彼はカルカッタ市に出て、カーリー女神を祀るダクシネーシュヴァール寺院に住み、やがて僧侶としての仕事を始める。そして、二十歳のころより、カーリー女神をまのあたりに「見る」ことを渴望しはじめる。毎日、あたかも生ける人である

かのように仕えている母なる女神像の内部にいる、絶対の存在を確認したいと思いはじめた。彼は神像に姿を見せてくれと語りかけ、あるいは寺の門が閉じられると、ひとり、寺の北辺の林をさまよい、瞑想してカーリー女神を求めた。憑かれたように女神を求める彼の姿は、他の人々には全く常軌を逸したものとみえた。なすべき仕事もなさず、生活のリズムは乱れた。時間も忘れて神像の前に坐りこみ、あるいは、夜中、林に瞑想する姿は鬼気迫る異常さを感じさせたことを、伝記作家たちはさまざまに記している。

そして彼は遂に見神体験を得、後年、それを語っている。絶望のあまり、目についた剣を喉元にあてがった時、「……世界は消え……涯しない光り輝く霊の大洋を見……言葉にはあらわせない歓喜の大海原に漂い……その光の海の底に母なる女神がいた。」³⁾

この時以来、ラーマクリシュナはしばしば女神を見ようになる。神と何らかの意味で関わりあるものに触れると、すぐに三昧に入り、神と即通してしまふ。たとえば、神の讃歌をききながら三昧に入り、少年の姿に幼童としてのクリシュナ（ヴィシュヌ神の化身）を見て三昧に入る等である。

見神体験は得たものの、ラーマクリシュナはそれをどのように理解していいか判らなかつた。ヒンドゥー教には瞑想をはじめとして神を見るための行法が伝承されている。それなりの文献もあり、実際に指導する師から弟子への、いわば、嗣法の伝承もある。しかし、ラーマクリシュナは誰の指導をうけたわけでもない。神

を求めぬ気持の強さと、自己流の瞑想でヒンドウ教の修行ウヂナチのあ
る程度のところまでできてしまった。それだけに、自分の内部の精
神の状況、あるいは外界とのかかわりを十分にもちえず、社会的
には狂気とも思われる言動をどう理解していいのかわからず、見当がつか
ず、悩んでいた。こうした時に、彼は二人の指導者に次々に出会
う。二十五歳から二十九歳のころのこと、彼らはラーマクリシ
ユナの精神の変革が真の修行の道を踏み外していないことを見て
とると、それを彼に教え、さらに発展させた。あたかも無人の広
野を一人さまよう感のあったラーマクリシユナは、はじめて自分
がどこをどう歩いているのかわかり、喜ぶと共に自信をえている。
そして、「私は発狂したのではなくてよかった」と正直に語って
いる。

以降、ラーマクリシユナはおのずとまわりに集まってくる人々
を教えはじめた。「神を見た者」としての強烈な自信をもって人
人に説き、悩みを去り、帰依をうけた。社会階層の上下に隔てな
く教を説き、清廉な生活は万人に慕われている。そして、四十五
歳の時に、後にヴィヴェーカーナンダとして知られるようになる
青年に出会い、四年後に自らと同じ体験を得させ、ここに真の後
継者をえた。翌年、五十歳で燃焼しきった短かい人生を終えてい
る。

ラーマクリシユナの数多くの神秘体験——その数の多いこと自
体が他の神秘家に比してユニークであるが——の中で、きわ立っ
て特異なのは、彼が予言者モハメットやキリストのヴィジョンを
見ていることである。

三十歳のころ、彼はイスラム教の神秘思想、スーフィズムの流
れの托鉢僧トクハツソウに出会い、その真摯な態度に感銘をうける。そして、
この人についてイスラム教に入信し、全生活をスーフィー行者の
それに合わせている。自らの信ずるカーリー女神の崇拜もすべて
中断した。アッラーの名を念じつつ瞑想に入った彼は、数日後に、
予言者モハメットのヴィジョンを見た。彼はアッラーに融けこみ、
アッラーはブラフマンに融け込むのを見て、ラーマクリシユナは
アッラーもまた唯一絶対者に帰することを疑わない。

それから八年後にも彼は同様の体験をキリストにおいてもつ。
パイブルを聞いてその内容の新鮮さにおどろくが、別の一日、あ
るキリスト信者の家で聖母マリアの画像を見て恍惚境に入り、
マリアと一体化する体験をもつ。彼はおそれ、自ら母と呼ぶカー
リー女神に「何をされるんです、助けて！」と叫んでいる。自分の
寺に戻ってからもキリスト教神秘の想念がはなれず、やがて瞑想
中にキリストのヴィジョンを見た。キリストはラーマクリシユナ
に近づき、身体の中に入りこんで姿を消し、自分は三昧の中でブ

ラフマンと一体化してしまふ。この時以来、彼はキリストもラフマンの顕現であることを確信しているのである。

ラ・マクリシュナにとって絶対の真実はラフマンであり、それは「実在・叡知・歓喜」(Sac-cid-ananda)⁽⁴⁾を本質とする。無形・無相だが、時に形あるものとしてあらわれたのがさまざまな神である。彼はいう。

「サッチダーナンダは無限の大海のようなものだ。寒さが海の水を凍らせて、いろんな形の氷が海に漂っている。それと同じように信仰の力がサッチダーナンダの海に形ある神を見せているのだよ。形ある神は信仰者のために現れている。そして知慧の太陽がのぼると氷はとけて元通りの水になる。」⁽⁵⁾

〔不滅の言葉〕一八八三・三・一一

絶対の真実をラフマンとすることはインド思想の伝統的考え方であつて、特に異とすべきことではない。よく知られているように、ラフマン (Brahman)―梵―は『アタルヴァ・ヴェーダ (Atharva Veda)』にはじめて抬頭し、ブラーフマナ文獻、そしてそれに続くウパニシャッド文獻において中心的地位を占めるに至る。多様な神々や現象の背後に唯一絶対なる存在を求めめる一元探究の営みは『リグ・ヴェーダ (Rg Veda)』よりはじまって少なからぬ名称を示しているが、ウパニシャッドの梵我一如の思想に結晶したといつてよい。そして時代の進展につれ、また哲学・宗教思想の展開につれ、至高の存在はしばしば「ラフマン」と

してとらえられるに至つてゐる。無論、一元的原理、実在を説く思想のすべてがラフマンを採用しているわけではないが、しかし、多様な現象の背後にある唯一者の存在をインド人は確信しているし、それを示す術語としてラフマンは最主要なものであることは疑いない。

それに応じて、神々もまた唯一者ラフマンに帰する、と考えられてゐる。インドには多数の神がいる。シヴァやヴィシヌのように全インドに神祠をもち、崇拜されている「偉大な神」もあるし、一地方のみに信奉されている神々もある。無数の村神もある。それぞれに機能、性格を異にしているし、成立、発展の経緯も複雑である。ヒンドゥー教が全インド半島に拡まってゆくプロセスにおいて、たとえば、シヴァ神は各地の類似の機能をもつ神を吸収することによって全インドを歩くと共に、自らの性格・機能を多様なものとした。⁽⁶⁾一方、ヴィシヌス信仰は化身 (Avatar)の觀念を導入することによって、起源やレヴェルの違う神、英雄、歴史上の人間(たとえばブッタ)等を自らの信仰体系に組み入れてゐる。こうした神々の発展・変容のプロセスは必ずしも十分に明らかではないが、しかし、歴史的発展の中に常に、神々は唯一絶対者に帰するものであり、その異なる局面を代表するものであり、従つて、諸神は、究極的には、同一であることが確信されている。ヴィシヌス信徒がシヴァ信徒に対立的感情をもちつゝ、ヴィシヌス神を崇拜したら、ヴィシヌスの顔が二つに割れ、

一面にシヴァ、他面にヴィシュヌの顔があらわれ、疑がう信者たちに、両者は同じであることを微笑みつつ告げた、という物語はヒンドゥー教徒一般の考え方を示している。宇宙の創造・維持・破壊を分掌するブラフマー・ヴィシュヌ・シヴァ神の「三神一体説」(Trimurti)も同様である。これはどちらかという^(トリアルムルティ)と神話的観念であって、実際の宗教信仰として定着したものとはいえないが、とにかく三神の背後に一者をみている。こうして、ヒンドゥー教の伝承は、多神教でありながら、同時に一神教的性格がかかわることを特徴としている。

神話、信仰対象の面で、唯一者が神々の背後にいるとするなら、それは教理の面でも同様のこととなる。唯一絶対者とは万物存在の成立を何らかの形で支える根拠たる真実であろうし、性格、機能、現象との関係、実践の方向などはさまざまに説かれても不思議はない。逆にいうなら、すべての教えは、いかに異なるものとみえようとも、それは便宜上のことであり、一の真実を開顯するものにほかならない。ラダクリシュナンはいう。「宗教的神秘を知性をもって表出するなら、それは相対的であり、象徴的なものでしかない。それは……一の中心的真実の異なる局面を示すもので、(それぞれに)異なるのが当然である。ウパニシャッドの聖仙以降、タゴール、ガンディーに至るまで、真理とは異なる色の衣服をまとい、異なることばで語られるものであることをヒンドゥー教徒は認めてきた」⁽¹⁰⁾のである。

さまざまに異なる神が、究極的には、唯一の絶対者にほかならず、すべての異なる教が、結局は、同一の真実を説くものにならず、という考え方はインド思想において重要である。何故ならこの考え方は信仰の対象や教義、実践のちがいに基づく各神の信徒間の確執を意味しないものとするからである。事実、ヒンドゥー教の伝承では、純粋に宗教的理由に基づく争乱や迫害の例はほとんどみることが出来ない。歴史的にヒンドゥー教は寛容な宗教であることは知られているが、その根拠の一つは正にこの点に見出されるといっている。

そして、ラーマクリシュナが無相・無形のブラフマンが有形のさまざまな神としてあらわれる、といい、宗派的確執の意味なきことを説くのも、こうした伝承をうけているのである。十九世紀のインドでは近代への覚醒が論じられ、インテリたちはヒンドゥー教の伝承をさまざまに批判し、反省し、見直していた。彼らが最も非難したもののが偶像崇拜である。ヒンドゥー教において神像崇拜、礼拝(Prayer)はごく普通だし、それなりの宗教的意味がある。しかし、当時の革新的なインテリの青年たちは現世利己的な儀礼よりは実存的信仰を真の宗教として求めた。同時に、社会に行われている神像崇拜は形式に流れ、清新な宗教的情感の失われた面のあったことも否定出来ない。ラーマクリシュナのまわりに集まってくる人びとの間でも、神の有形・無形論争は大きな関心事だったのである。

しかし、ラーマクリシュナにとっては、カーリー女神という有形の神を通じて「サッチダーナンドという大海」のごときブラフマンに包まれている自分を「見て」いる。この解脱した境涯からみるならば、万物はいやでもブラフマンそのものだし、すべての人間も「ナーラーヤナ」(＝ヴィシシュヌ神)の化身にほかならない(『不滅の言葉』一八八四・二二・二七)ことが歴然としている。神もブラフマンのあらわれである。ましてカーリー女神に至っては、自分で三昧の瞑想体験の中にその生き姿を見、訴え、対話している。彼にとっては単なる偶像などでは決してなかったのである。

だから彼はこの点については大らかで、「人格神を信じている人のところでは有形の神々に賛成し、無相の存在を信じている人のところでは形なき神に賛成しているのさ」(『不滅の言葉』一八八二・一〇・二三)と弟子たちを笑わせている。しかし、実際には、有形の神の信仰からはいる方がはるかに容易である、と説いて、伝統的な信愛信仰の常道に従っているのである。

3

さて、ラーマクリシュナは上にのべたことがらを次のように語っている。

「宗教のことで、あっちの人と口論したり、こっちの人とケンカをしたりしている人間がいる。ヒンドゥー教徒と回教

徒。ヒンドゥーの中ではシャクティ派、ヴィシシュヌ派、シヴァ派、梵協梵協会梵協という新手、みんな互いにイガミあっている。みつともないねえ。

クリシュナと呼ばれている御方が、同時にシヴァであり、アディヤ・シャクティ(根本造化力)、つまりカーリーであり、また同じくイエスでありアッラーである——と、こういうことを理解するだけの知性がないからだよ。一つの神に千もの名前があるんだ。

本体は一つ。名前はさまざま。皆は一つのを求めているんだよ。だが、場所がちがいがい、器がちがいがい、名前がちがう。一つの池に沢山の水汲場ガットがあるだろう。ヒンドゥー教徒は或る場所から水を汲んで水ガメに入れて、ジャルと呼び、回教徒は別なガートから水を汲んで皮袋に入れてパーニと呼び、キリスト教徒はまた別なガートから汲んでウオーターと呼ぶ。もし互いに、イヤこの品物はジャルじゃないパーニだ、何でパーニなぞであるものか、ウオーターだよ、そうじゃない、ジャルだよ、なんて言い合いをしたら笑い話じゃないか。これが宗教、宗派間の争い、意見のちがいがい、ケンカだよ。宗教のためになぐり合ったり殺し合ったり、戦争したり、愚かなことだね。どの宗派の人も皆、あの御方への道を進んでいるんだ。誠心誠意、一生懸命になっていれば、誰でもあの御方をつかむことが出来るんだよ。

よく聞いておきなさい。ヴェーダ、プラーナ、タントラ、すべての聖典はあの御方に向って祈り、求めているんだよ。

他の誰にも祈ってやしない。あの一なるサッチダーナンダ
〔実在、叙知、歓喜〕だ。ヴェーダでサッチダーナンダ・プ
ラフマンと呼ぶ御方が、タントラではサッチダーナンダ・シ
ヴァといい、その同じ御方をプラーナではサッチダーナンダ・
クリシュナと呼んでいるんだ。〕

〔不滅の言葉〕一八八四・六・二〇

たしかにラーマクリシュナは、先述したようにモハメットやキ
リストといった予言者を「見」ている。だから、彼にとってすべ
ての本体は一つであり、同一の真実に帰することは疑がう余地の
ない明らかなことであろう。

しかし、神秘体験といえども、それなりの教義や信仰体系、大
きくいつて「文化」の影響下にあることは言うまでもない。アヴ
イラの聖テレシアの神秘体験の中にカーリー女神があらわれるは
ずもなく、ラーマクリシュナは聖母マリアの生きた姿をみてブラフ
マンの实在を確信したわけでもない。ブラフマン、アートマン、
神々や伝統的世界観、儀礼といったヒンドゥー教の文化伝承の中
にラーマクリシュナは生きていたし、その中でこそ、カーリー女
神を見る体験が可能だったわけである。その上で彼は実在サッチダーナ・叙知・
歓喜を本質とするブラフマンを知った。「覚知」と彼はいうのだ
が、有形の神々を含む万物がブラフマンにほかならないことを知

っている。この唯一絶対の实在をこそ、彼は真実として見たとい
うことが出来るし、これはその通りであろう。

同様な意味で彼はモハメットやキリストを見た、と言うのだが、
だからといって、イスラム教やキリスト教でいう「真実」が、果
してラーマクリシュナの真実と同じだと簡単に言い切れるものか
どうか。ラーマクリシュナがカーリー女神を通して得た見神体験
が、モハメットやキリストを「見た」事実にかぶせられている可
能性は十分に考えられるからである。つまり、モハメットやキリ
ストも、彼のヒンドゥー教徒としての文化伝承の中で見られてい
るのではないのか。

これを別の面から言えばこういうことになる。つまり、イスラ
ム教なりキリスト教なりの文化伝承の中にある神秘家たちが、そ
れぞれの見神体験を通して感得した絶対なる真実、事と理を不二
なるものとして自らの血肉において体験した事実と、ラーマクリ
シュナの真実が果して同一内容だと言えるものかどうか。個々人
の宗教体験のアイデンティティは容易に出来ることではないもの
であろう。

しかし、こうした神秘家たちのことばがよく似ていることも事
実である。いずれも、自我が一切たない自他不二のところでは何
ものか絶対なるものに触れていて、高次の精神性の、おそらく、
同じ平原にあることは十分に想定している。かりにこの平原に到
達した宗教者が出会った時、互いに肯づき合い、認め合う「対

話」が成立するであろう共通の基盤はあるとみてよい。

とにかくラーマクリシュナは真実の一なることを確信し、諸宗教間の争の意味なきことを説いた。その教えは彼の後継者ヴィウエーカーナングにうけつがれ、「ラーマクリシュナ教団」の設立と共に教会的实践にうつされた。ラーマクリシュナはインドの伝統的な思想、つまり、真実は一つであることを、最も端的に主張したと同時に、そのことによってこの考え方はさらに確実なものとして、多くのヒンドゥーに受け入れられたのである。

インド最古の文献『リグ・ヴェーダ』一・一六四・四六には次のような一節がある。

インドラ、ミトラ、はたヴァルナ

又はアグニと呼びなせど

翼美しく天翔ける

鳥(太陽)の名にこそ。歌人は

一つのをさまよふまに

名づけて呼びつ、アグニ、ヤマ、マータリシユヴァン

(壯直四郎訳)⁽¹²⁾

神々は名こそ異なれ、実は一なる太陽の呼び名であることを言うものだが、ここにすでに一元の探求ははじまっている。さまよふまに呼ばれる多様の背後に唯一者を求める傾向は、その後も長くヒンドゥーの文化伝承の中に発展をみせ、ラーマクリシュナに至っているのである。

(1) ラーマクリシュナの生涯、思想、および参考文献等に関しては拙著『ラーマクリシュナ』(「人類の知的遺産」53) 講談社、一九八三年を参照されたい。

(2) ラーマクリシュナは自著をのこさず、その言動は弟子が記録し、日記体で書かれた(Kāṇḍīya) (ベンガル語) によって知られる。上述拙著参照。以下に引用される時は同語録中の年月日をもって示されている。

(3) ロマン・ロラン、宮本正清訳(訳)「ラーマクリシュナの生涯」(「インド研究」)、みすず書房、一九六二年、一九一〜二頁。

(4) sat (次の cid の影響で sac と書かれる) は実在であり、cid は体験の中に永遠の实在を感得した知慧、そして ananda はこの際に生ずる歓喜の情である。すでにウパニシャッド文献に説かれている。

(5) 上掲拙著、一七九頁。(田中嫺玉訳)

(6) Sakumari Bhattacharjī, *The Indian Theogony*, Cambridge, 1970, pp. 109-207 奈良康明・山折哲雄(共編著)『神と仏の大地インド』佼正出版社、昭56。

(7) S. Bhattacharjī, op. cit., pp. 287 ff. 山崎利男『神秘と現実—ヒンヌー教』淡交社、昭44、一三三頁以下参照。

(8) Radhakrishnan, *Hindu View of Life*, London, 1927, p. 28.

(9) L. ルヌー/J・フィリオザ、山本智教(訳)『インド学大辞典』第二巻、金花舎、一九七九、一三八頁参照。

(10) Radhakrishnan, op. cit., p. 27.

(11) 上掲拙著、一八四〜五頁。(田中嫺玉訳)

(12) 壯直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』創元社、昭28、六一頁。(なら・やすあき、インド宗教文化史、駒沢大学教授)